

令和 2 年 6 月 21 日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K11939

研究課題名（和文）手術を受ける患者と手術室看護師の相互作用における笑いに関する研究

研究課題名（英文）Recognition of laughter by operating room nurses in their interaction with patients undergoing surgery

研究代表者

青池 智小都 (Aoike, Chisato)

福井大学・学術研究院医学系部門・特命助教

研究者番号：00749658

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：手術室入室から麻酔導入時までの中で、手術を受ける患者と手術室看護師の相互作用において、手術室看護師が笑いをどの様に感じているか明らかにすることを目的に、手術室看護師13名に半構成面接法によってデータ収集し、グラウンデッド・セオリー・アプローチを基に継続的比較分析を行った。さらに、手術室看護師220名にアンケート調査を実施した。手術室看護師は患者に比べて、安心感や気持ちが楽になる、心に余裕ができるとは思ってないことが示唆された。また話しやすくなる等、患者とのコミュニケーションが円滑になることや、笑いに対しての患者の反応から患者の精神状態を知り、患者に対して接し方を変えることができることを認識していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

手術を受ける患者と手術室看護師の相互作用においての笑いは、安心感や気持ちが楽になる、心に余裕ができるなど患者の精神的安楽に繋がるとともに、手術室看護師と患者との円滑なコミュニケーションや、笑いに対しての患者の反応から手術室看護師は対応を変えるなど、患者が安全に安楽に手術を受けることができる看護を提供できる。  
また手術看護の教育に活かすことで、手術室看護師のスキルアップにも繋がり、看護の質が向上すると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify how operating room nurses feel about laughter, during the interaction between the patient undergoing surgery during the period from admission to the operating room through to the introduction of anesthesia. We collected data from 13 operating room nurses by a semi-structured interview method, and conducted a continuous comparative analysis based on the grounded theory approach. Furthermore, a questionnaire survey was conducted with 220 operating room nurses. This study suggests that operating room nurses do not think that they feel more comfortable compared to their patients, or that they can find room to breathe. In addition, they recognized that the patient's reaction to laughter, which facilitates communication with the patient such as by making talking easier, allowed the nurse to know the patient's mental state and change the way he / she treated the patient.

研究分野：看護学

キーワード：手術室看護師 笑い 不安 コミュニケーション リラックス

## 1. 研究開始当初の背景

手術看護において患者の心理に沿った相互作用を行うことが適切な支援に繋がると考え、研究者は手術室看護師を対象に「手術室入室から麻酔導入時までの患者と看護師の相互作用に関する研究」に取り組んだ。結果、手術室看護師は手術室入室から麻酔導入時にわたり、患者の思いに沿って笑い・リラックスできる話しかけをする行為を行っていたことを明らかにした<sup>\*4</sup>。この研究結果より、手術室看護師と患者の相互作用の中で、笑うことが手術室看護師および患者がどのような心理状態になるのか着目した。

古代ギリシアの Plato から現代にいたるまでユーモアや笑いについて様々な研究が行われており、笑いは、人間関係を円滑にするための楽しいコミュニケーションであることが示唆されている。また、笑いは、人間の健康にプラスの影響を及ぼすことを、テレビや雑誌で取り上げられている。先行研究<sup>\*3,6,10</sup>では、ユーモアが対人コミュニケーションにおいて、ポジティブな機能を示すことや、笑いがリラックス効果や抑うつ感、不安感、疲労感が軽減し精神的健康を維持していくために、必要不可欠であることが明らかになっている。

以上より、ユーモアや笑いが、不安・緊張の緩和や円滑なコミュニケーションに効果があると言える。しかし、手術室看護師や手術を受ける患者を対象にしたユーモアや笑いに関する研究はみられなかった。海外においても、手術中の医師と看護師による会話の中でユーモアと笑いが関わり方によって違うという報告は見られたが、手術室看護師と患者の相互作用によるユーモアや笑いについての研究はみられず、手術室における笑いの効果は明らかになっていない。

## 2. 研究の目的

本研究は、手術室入室から麻酔導入時までの時間の中で、手術を受ける患者と手術室看護師の相互作用において、手術を受ける患者と手術室看護師が、手術室で笑うことをどのように感じているか明らかにすることを目的とし、半構成的面接法(研究1)と自作の自記式質問用紙を用いて調査研究(研究2)を実施する。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究1

**調査対象:** 東海・近畿・北陸の大学病院に勤務している経験年数が5年目以上の手術室看護師20名程度

**調査方法:** 対象施設の看護部長に電話で看護研究の趣旨を伝え、看護研究の依頼書を送付する。研究協力が得られた施設の手術室看護師長に、本研究への参加希望者及び対象施設の師長が推薦した手術室看護師を募ってもらい、インタビュー日時を決定する。インタビュー当日、対象看護師に研究の趣旨を説明し、同意を得た後インタビューガイドを用いて、半構成的面接を行う。面接で得たデータを概念的に整理し、サブカテゴリー化、カテゴリー化する。

### 分析方法

逐語録とフィールドノートを基に、グラウンテッド・セオリー・アプローチを用いて分析する。

- ①得られたデータを、フィールドノートを用いて整理する。
- ②得られたデータを個々のケースごとに逐語録をおこし、手術室看護師の笑いについて感じたことについて、類似の意味を示す概念を整理してサブカテゴリー化する。更に抽象度をあげてカテゴリー化する。
- ③抽出したカテゴリー間の関係を検討し、手術室看護師が手術室内で患者と笑うことの認識について内容を整理し、カテゴリー間の関係性とプロセスを明らかにする。

## (2) 研究2

**調査対象:**東海・近畿・北陸の大学病院で勤務すると手術経験年数が5年以上の手術室看護師、1000名程度

**調査方法:**研究1で明らかになった研究結果のサブカテゴリー、カテゴリーを質問項目とした自作の自記式質問用紙を用いて、手術室入室から麻酔導入時までの手術を受ける患者と手術室看護師の相互作用の中で、患者と看護師が、手術室で笑うことをどのように感じているか調査する。看護部長宛てに、看護研究の依頼書、自記式質問用紙(以下調査票とする)を送付する。調査票は、看護部長から手術室看護師長へ渡され、手術室看護師長から研究協力が得られた手術室看護師に手術終了後、配布する。手術室看護師に対して、調査票は一定期間(1~2週間後)の間に返送してもらい回収する。

### <調査内容>

手術室看護師に①~③の内容の調査票を使用し質問をする。

- ①属性:年齢 性別、臨床経験年数・手術経験年数(手術室看護師のみ回答)
- ②手術室入室から麻酔導入時までの時間の中で、手術を受ける患者と手術室看護師の相互作用において、手術室内での笑いの有無と必要性。
- ③自作の質問項目(研究1で明らかになったサブカテゴリー及びカテゴリーを用いて質問項目を構成)に対して、4件法で回答を求める。

### 分析方法

SPSS 統計解析ソフト(SPSS Ver24)を使用し、性別、経験年数、笑うことの必要性の有無と、【精神・身体面】の12項目、【信頼関係】の3項目、【一体感】の3項目、【コミュニケーション】2項目、【ケア】の5項目の合計25項目を下位項目として、2検定、マンホイットニーU検定+多重検定の補正(ボンフェロニ法)を行う。また、下位項目を<思わない> <あまり思わない> <やや思う> <思う>の4段階方法で調査し、単純計算および平均値で比較する。

## 4. 研究成果

### (1) 研究1

入室から麻酔導入時までの患者と看護師の相互作用による看護師の笑いの認識は、8つのカテゴリーであった。手術室での笑いは、患者・看護師の人格や個性、疾患による悲嘆や不安【**様々な要因によって左右される**】ということや、術前訪問に行かないと手術室ホールで会うのは初対面で笑顔や笑うことは難しく、さらにマスクを装着しているなど【**手術室の特殊性によって笑うことは難しい**】という思いが根底にある。けれども手術室ホールに来た時は、最初に笑顔で挨拶をして、その【**患者の反応からアセスメントし個別に対応していこう**】という思いが麻酔導入時まで続けられる。そのような中で、笑いがあると緊張がとれリラックスでき【**患者・看護師共に精神的に安楽になる**】【**信頼関係が構築される**】。さらに患者・医療者共に笑いあうことの相乗効果で雰囲気良くなり、チームとしての【**一体感がうまれる**】。笑うことによって【**患者・看護師共に精神的に安楽**】【**信頼関係の構築**】【**一体感**】がうまると【**ケアがスムーズに進む**】ようになり、かつ患者、看護師、医師間で話しやすく言いやすい、相手に聞きやすくなり【**コミュニケーションが円滑になる**】。つまり、手術室看護師は個のパーソナリティーや手術室の特殊性から笑うことは難しいと感じながらも、初対面の時には笑顔で挨拶し、患者が笑うかどうかの反応から心理状態をアセスメントし、患者に不快感をあてないように個に応じて笑いを取り入れようとしていることが示唆された。また、笑いあうことにより患者と看護師間だけでなく、患者と医師、看護師と医師間においても話しやすくなり、円滑なコミュニケーションが取れると考えられる。円滑なコミュニケーションが取れることで、コミュニケーションエラーによる医療事故防止に繋がり、安全が確保できると推察

する。

## (2) 研究2

東海北陸地区で同意が得られた7施設の手術室看護師220名を対象に、手術室の中での笑うことについて、アンケート調査を実施した。アンケート回収83人(回収率37.7%)、有効回答数82人(有効回答率98.8%)だった。対象者の属性は、男性10人(12.2%)女性72人(87.8%)、平均年齢36歳±9.851、看護師経験平均年数は13.4年±9.693、手術室経験平均年数は8.75年±6.742だった。

SPSS Ver24を使用し、性別、経験年数、笑うことの必要性の有無と、【精神・身体面】の12項目、【信頼関係】の3項目、【一体感】の3項目、【コミュニケーション】2項目、【ケア】の5項目の合計25項目を下位項目として、 $\chi^2$ 検定、マンホイットニー-U検定+多重検定の補正(ボンフェローニ法)を用いて明らかにした結果、性別、経験年数と笑うことの必要性の有無、及び性別、経験年数と笑うことの必要性の有無と下位項目に有意な差は見られなかった。また、下位項目を<思わない><あまり思わない><やや思う><思う>の4段階方法で調査し単純計算および平均値で比較した。結果、手術室看護師が思う手術室の中での笑いは、患者は表情が和らいたり、安心感がうまれる、気持ちが楽になると思っているが、手術室看護師は患者に比べて、安心感や気持ちが楽になる、心に余裕ができるとは思っていないことが示唆された。また、看護師は、話しやすくなる、話の輪が広がるなど患者とのコミュニケーションが円滑になると認識していた。さらに、笑いに対しての患者の反応から、患者の精神状態を知り、患者に対して接し方を変えることができると認識していた。

以上から、手術室では患者の精神的安楽の援助に、タッチング・アロマセラピー・音楽療法等が用いられているが、笑いについても手術を受ける患者の精神的安楽援助方法の一手段として用いることができると考える。

今回、手術室看護師の認識は明らかになったが、患者はどの様に考えているか明らかにすることは出来なかったため、今後の課題とする。

## <引用文献>

本文中に\*印で表示。

- 1 雨宮俊彦:笑いとユーモアの心理学,ミネルヴァ書房,2016.
- 2 Allen Klein:笑いの治癒力,創元社,2009.
- 3 藤原裕弥:笑いと笑顔が心身の健康に及ぼす影響,安田女子大学紀要,43,67-75,2015.
- 4 青池智小都,酒井明子:入室から麻酔導入までの看護師の認識と行為に関する研究,第23回日本手術看護学会誌,208,2009.
- 5 伊丹仁朗:笑いの健康学 笑いが免疫力を高める(みんなの健康),三省堂,1999.
- 6 木村幸生,井上誠,井上セツ子 他:精神科病棟スタッフに対する笑いの効果、笑うことによりどのような効果がもたらせるか,日本精神看護学会誌,54(2),156-160,2011.
- 7 マシュー・M・ハーレー ダイニエル・C・デネット レジナルド・B・アダムズ Jr.:ヒトはなぜ笑うのか,勁草書房,2015.
- 8 志水彰,角辻豊,中村真:人はなぜ笑うのか,講談社,2007.
- 9 上野行良:ユーモアの心理学,サイエンス社,2014.
- 10 谷忠邦,大坊邦夫:ユーモアと社会心理学との関連についての基礎的研究,対人社会的心理学的研究,8,129-137,2008.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 青池智小都	4. 巻 24
2. 論文標題 手術室看護師が立案した周手術期におけるハイリスク患者の看護診断の特徴	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 看護診断学会	6. 最初と最後の頁 12-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 青池智小都
2. 発表標題 入室から麻酔導入における患者と看護師の相互作用の中での手術室看護師の笑いに対する認識
3. 学会等名 第38回日本看護科学学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 ChisatoAoike
2. 発表標題 Characteristics of perioperative nursing diagnoses for high-risk surgical patient.
3. 学会等名 NANDA-I国際学会（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 青池智小都
2. 発表標題 手術室看護師からみた周術期の現状
3. 学会等名 第30回日本手術看護学会年次大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 青池智小都	4. 発行年 2018年
2. 出版社 金芳堂	5. 総ページ数 114 - 123
3. 書名 障がい児・者の手術看護マニュアル	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	長谷川 智子  (HASEGAWA Tomoko)  (60303369)	福井大学・学術研究院医学系部門・教授   (13401)	
研究 分担者	梅田 尚子  (UMEDA Naoko)  (10808306)	福井大学・学術研究院医学系部門・特命助教   (13401)	